支えあう喜びを新しい世代へ

からばす

Calebasse

企画/編集/発行　特定非営利活動法人
カラ＝西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

Issue Number 23

第23号（2010年4月1日発行）

CONTENTS

p1 キンシャサから
JICA保健アドバイザー（コンゴ民主共和国）
国立国際医療センター 国際協力局専門官
池田　憲昭

p2 マリ現地事業の視察　村上 一枝

p4 現地活動報告
- 小学校と識字教室の建設（p.4）
- 野菜栽培と自然保護（p.4）
- 保健衛生（p.5）
- 女性適正技術活動（p.6）

p7 東京事務局より　榎本雅子

p8 国内活動

キンシャサから

JICA保健アドバイザー（コンゴ民主共和国）国立国際医療センター 国際協力局専門官　池田　憲昭

私がアフリカに関わるようになって10年になろうとしている。カラの活動に比べればたった10年である。アフリカといっても、地方病院と地域を結ぶ仕事や保健政策や計画立案という仕事が中心で、カラのように地域に根差した地域のニーズに直接応えるようなことをしているとはいえない。だからカラの代表の村上さんと話す時はいつもそのどっしりとした経験に根ざした眼差しに圧倒される。村上さんには誰もがなれるわけではないと感じてしまう。

カラの活動目標は、「村の人たちが、より健康で明るい毎日を送れるように支援すること」と明快だが、マリという最貧国でそのような活動をすることがどんなに大変なことか、隣のセネガルで仕事をしたことがある私には想像できる。

とりわけ読み書きのできない女性が多いサブサハラ・イスラム圏の地方の村で、その弱い立場の女性たちが、ある日自分の才能に気付いて自主的な活動ができるようになっているというと聞くと、素直に驚きを覚える。カラの住民に寄り添って一緒に歩いていくという、生活に直結して息の長い女性らしい支援のたまものなのだろう。

アフリカの子供と女性は、まだまだ弱い立場で様々な脅威にさらされている。特に地方の貧しい村では、妊娠に関係する体の不調に苦しむ女性や、赤ちゃんや子供の栄養失調や発熱、下痢を心配するお母さんたちを安心して支えるべき診療所や病院が近くても30キロも離れた町にしかないというようなことが普通である。やっと辿り着いた診療所でも、診察まで長時間待たされる、待合室の椅子は少ないので地べたで座らなければいけないこともある。やっと診察が開始されてもお金持ちや診療所に勤めている人の知り合いから先に呼ばれる。早く治療を受けたいのに、薬や治療費が足りないと金策にでかけなければならない、など本来なら診療所では主人公であるはずのケアをされるべき人たちが粗末に扱われるという事例がよく報告されている。 P02へ→

診療所の庭で診療を待つ女性たち（セネガルのある地方）

http://ongcara.org/
からばす NO.23 2010/4/1 発行

このように診療所に来た人たちを、いつも関心の中心においてケアをするという当たり前のことができないのは、アフリカだけのことではない。しかし資源の乏しいアフリカだからそういうことがあってもいいとは、保健に携わる人たちは決して言ってはいけないのである。

最近私はアフリカで保健に関わる人たちが、診療所に来た人たちを、いつも関心の中心においてケアをするという気持ちを持つためには、どうしたらいいかを考えている。そのような気持ちでケアする人自身の気持ちが穏やかになり、ケアをされる人はほっと安心できるというあたりまえの診療環境を作ることにお金はほとんどかからない。そのような心持のケアラーを増やすことが、人材が少なく、薬や機材の乏しいアフリカにおいても、結局のところケアの質を改善する第1歩なのだと感じている。

コンゴ河の辺にあるキンシャサの街は紛争後復興の途中であるが、大陸を潤す大河の創る空気が不幸な歴史を打ち消すかのように満ち満ちている。
その遥か遠方でありながら同じ大陸で活躍を続けているカラの住民に寄り添って歩くその姿を思いながら……。

産前検診の待ち時間に、助産師が血圧測定をしている。この工夫は助産師たち自身が考えたことで、ケアされている女性だけでなく助産師たちの表情もおだやかである。
（コンゴ民主共和国、キンシャサ市内の診療所）

マリ現地事業の視察　村上　一枝

2010年が明け、1月から2月にかけて現地事業の視察に行ってまいりました。

とにかく日中40度の猛烈な暑さに驚き、今年も雨季が早く来るのではないかと予想しています。現地事業も計画通りに進み、カチョラ村小学校やカチョラ村多目的女性センター(これは産院を兼ねています)の建設、4カ村の識字教室や5カ村へのトイレットの建設も終了しました。

建設物はさておき、現在進行中の活動地域であるコミュンの各村の人たちが熱心に活動をしているのが目に付きました。以前建設した、識字教室は昼間は小学校に使用し、夜間は識字学習に使用している村が3カ村あり、教育が地方の片隅にも普及してきているのを感じました。

このように小学校に使用されているゲレフォガ村識字教室には82人の生徒さんが村出身の教師のもと、センゲェイ村には32人がバマコから来た若い女性教師と、ヌムブグー村では1年生と2年生がそれぞれの教師のもと、合わせて68人が学習をしていました。ヌムブグー村では土レンガの校舎を建設する予定なのだそうです。

また、カニカ小学校を訪問し、前号でお知らせいたしました皆様からのご寄付による机を使用しての学習を視察して来ました。カニカ小学校からは、バンバラ語で書いたお礼の手紙を貰いました。現在の生徒数では製作した机が全部使用されている状況ではありませんが、今後の生徒数の増加を考えて、十分に足りる数と思います。校長先生の話では、女児には就学は必要ない、と考える親がまだまだ多くて女児の就学率が低いのが残念である、ということでした。生徒さんたちは、元気いっぱいで私が教室へ顔をだすとただちに立ち上がり、両腕を胸に組み「ボンジュール　ムッシュ」と挨拶をしてくれますと、教師は「マダムだ!!」と訂正させ、再度生徒さんたちは「ボンジュール　マダム」と言ってくれました。かわいい子供たちです。

新しい机で勉強するカニカ小学校の生徒

現在進行中の、村の女性5人（このグループをK会といい、健康を指導する女性の会の意味です）がカラから研修を受けて指導者になり、各自の村の人たちへ病気予防や公衆衛生知識を啓蒙・啓発していく事業では、今まで目に見えてこなかった女性たちの能力が発揮され、驚くことばかりでした(後述の保健衛生事業の項を参照してください)。
彼女たちを指導するスタッフのアワの猛烈な指導にも驚き、彼女だけではなく、毎回一緒に行動しているアシスタントスタッフや、育成した所産師もそれぞれ同様なことを指導しますから、ジット耳を澄ましている女性たちには逆に負担になるのではないかと思い、多少改めてもらう点を指摘してきました。時として研修生よりも指導者の数が多くなることもあり、K会5人の女性はバンバラ語を識字学習で覚えた人たちですから、研修会ではカラはノートとボールペンを支給しますが、指導者のアワは一切授業中には書くことを許可しません。とにかく頭に叩き込むように指導します。同じことを何回も何回も説明して一人一人に反復させます。このK会の研修が終了すると、各村でK会メンバーによる啓発教育が始まります。ヌムブグー村のある男性は「結婚以来30年になるが、このようにキチンと掃除をすることを妻は知らなかったが、今は部屋も庭もきちんと掃除をするようになった」と喜んでいたそうです。

この他にとても嬉しいことがありました。それは以前バブグ村を活動の中心の村にしていた時期にカラの2代目アシスタントスタッフとしてバブグ村の青年3人を採用していました。その一人にフセイニジャラという青年は、無口でまじめでとても利口な青年でした。就学経験もなく、まったく字（バンバラ語もフランス語も）を知りませんでしたが、識字学習を続けて数年のうちに識字教師になり、更に弟をドウンバ村の小学校へ就学させるようになりました。しかしその後カラを退職し家族からコンゴ共和国へ出稼ぎに出されて11年が過ぎました。バブグを出た時には多分19歳でしたから今は30歳くらいになっているはずです。今回の視察中に時々村で「フセイニはどうしているの」と運転手のセイドウと噂をしていましたら、スタッフのスマイラが「数日前（今年1月中旬頃）にバマコからフセイニのお嫁さんがコンゴへ行ったそうだ、でもまったくフセイニは知らない人らしい」ということをバブグ村から聞き込んできました。「エッ、フセイニの顔も知らないのにどうするんだろう」と私、「何十年か後になって、結婚相手を間違っていると気がつくこともあるかもしれない、その時にはゴメンナサイ、って言って許してもらうしかない」とセイドウは気楽な事を言っていましたが、とにかくおめでたい話でみんなで喜んでいました。

その翌日コニナ村からバマコ事務所へ帰った日の夜に突然フセイニから私宛に電話があり、これにはとても驚きました。彼はフランス語も話せるようになり、今はコンゴとサウジアラビアを往復して商いをしているということでした。
「いつバブグへ帰ってくるの?」と聞くと、「2011年にバブグに帰るからその時に会いたい」といっていました。

多分、彼はバブグ村からコンゴ共和国へ出稼ぎに行き家族を支えるために必死で働き、勉強したのでしょう。とても偉い青年だと感激しました。同時にこのような青年のいる国の潜在的な力強さを感じました。来年再会するのがとても楽しみです。

現地活動報告 2009年11月～2010年3月

小学校と識字教室の建設

外務省の日本NGO連携無償資金協力による支援でカチョラ村小学校と4カ村（ンペプグー村、バシブグー村、ファラコブグ村、バラバン村）の識字教室の建設が終了しました。

先の『からばす22号』でお伝えしましたように、昨年の豪雨の時には建設途中だった識字教室の一部が崩壊してしまいましたが、それらも2010年1月末には村人の労働奉仕で補修して教室が完成しました。

以前カラが建設したセンゲエ村識字教室を村の小学校として利用している。

これらの識字教室の建設は、村によって非常に出来具合が異なります。それは、出稼ぎ先で左官の仕事をしていた人のいる村の教室はとてもきれいに出来ていますが、そのような人がいない村はあまり上手ではありません。以前は、雨季の豪雨にたたかれて北東面の外壁が剥がれ落ち、翌年には修理が必要でしたが、現在は教室の外壁全面に釘を打ち込み、針金を張りめぐらしてその上にセメントを塗るようにしましたので、外壁が剥がれ落ちるようなことは無くなりました、しかし資材購入費がかかるようになりました。

また先述のように、ある村では識字教室が村立小学校（CED）として使用されていることにも村を訪ねてはじめて知り、驚きました。2000年代にはこのように村が自主的に小学校の開設を望む声はあまり聞かれませんでした。

しかし、マリ共和国の義務教育は中学校までですから、このように小学校へ通学する子供たちは当然中学校まで進学するようになります。しかし、現在トゥグニコミュン内31カ村には中学校が一校しかありません。教育熱が高まっていることを考えても、近い将来には中学校の開設を希望する村が多くなると思います。教育熱が高まることは喜ばしいことですが、一方、両親の負担金(子供一人についての負担金は、村によって異なりますが、最低は300円くらいです)や、まだ多くある両親の教育に対する不理解なこと、出身村から中学校のある村までの距離、村の義務である教師住宅の建設、そして教師への国からの給料の支給が順調に行くかどうかの問題など多くの難問を抱えています。果たして資金的にも中学校の建設が出来るのかどうかも心配になります。そして大きな問題は、子供数の増加です。

野菜栽培と自然保護

カラはトゥグニコミュンにおいて、2001年から現在までに14カ村に女性野菜園を造成しました。すべての野菜園は生産高に違いはありますが、女性たちは、以前よりも多くの野菜を毎日の食事に取り入れているのみならず、余剰に生産された野菜を販売して収入を得、それを有効に活用するようになりました。ある女性は、その収入を元手に小商いをしています。女性の収入を得る道が多くなったといえます。

表には、2010年1月分に於けるモバ地域の各野菜園からの生産高による自家消費量と主婦たちの収入を列記しました。

表中の各野菜園は、種の播種や苗の定植行った時期が異なり、収穫時期も違いますから、同じようには比較できませんが、収入を得ていること、食生活が変わっていることに間違いはありません。

たとえば、5人家族で1日3kg食べるとして、ダニ村の女性の収入状況から考えると、主食のトウジンヒエの価格は3月の高騰期に1kg当り（160cfa）30円ほどしますから、家族を約3日支えることができる額であることが推測されます。

野菜園名	野菜種	1月の生産高	自家消費量	販売量	1月個人収入高 1cfa=0.184円
モバ村	キャベツ サラダ菜 タマネギ	2014コ 12395株 1276kg	24% 41% 34%	76% 59% 66%	7,500cfa (1,292円)
ンゴロブグ村	タマネギ パパイア サラダ菜 キャベツ	1428kg 1123コ 9511株 764コ	48% 30% 33% 29%	52% 70% 67% 71%	11,795cfa (2,170円)
ママブグ村	パパイア タマネギ キャベツ	1316コ 986kg 1155コ	46% 37% 40%	54% 63% 60%	8,335cfa (1,534円)
コニナブグ村	タマネギ サラダ菜	800kg 6004株	41% 50%	59% 50%	2,585cfa (475円)
ドウグラコロ村	キャベツ タマネギ サラダ菜	1206コ 700kg 4320株	32% 28% 28%	68% 72% 72%	3,920cfa (722円)
ベレニコ村	トウガラシ パパイア	136kg 1049コ	36% 55%	64% 45%	2,060cfa (379円)
ダニ村	サラダ菜 トウガラシ	5014株 56kg	62% 50%	38% 50%	1,160cfa (213円)

自然保護面での活動は、近年は植林地は造成していません、各村で自然パトロール隊が活発に活動をしています。以前ご報告いたしましたように、ドウグラコロ村は薪の販売を生業としていますから、それに反するこの活動から脱会し、相変わらず街道に薪を山済みして販売しています。しかし、今は自村の森林が非常に減少してしまったので、隣村のベレニコ村の森林を無断で伐採して販売し収入を得るようになりました。ベレニコ村の森林パトロール隊の人たちがそれを発見して伐採された木に灯油をかけて燃やしてしまいました。これが今乾季に2回ありました。この事は直に治水森林局の役人へ届けられ、ドウグラコロ村の人が罰金を支払っています。3度目には監獄へ送り込まれると言う警告を受けています。しかし、ドウグラコロ村の森林が実際には非常に減少し、収入も減ってきましたから以前にも増して生活が苦しくなってきました。この状況を考えて村の女性たちは、野菜栽培に以前よりも力を注ぐようになりました。

コニナ村の4haの森林造成地からは、大きく生育したユーカリを順繰りに伐採して建設用材として販売し、その収入を村の深井戸の修理費に充てています。この造成地はコニナ村の青年たちが造成し管理されています。この造成地から得た収入は、その都度村のために利用しています。

この村の青年グループリーダーはスマイラダンベレという非常に優秀な青年で、彼はトウグニコミュンの役人になっています。この青年が村の青年たちのリーダーですから、コニナ村には現在は何の問題も無く穏やかです。

現在のカラの植林事業は、ダニ村のようにローカル種のニェレ、バオバブ、ドウグラ、ジジフィスモーリタニア等を、また野菜園内にはカシューナッツやマンゴを植栽しています。コニナ村青年たちは、カシューナッツも栽培していて、ナッツを収穫して市場で販売しています。近年は、このカシューナッツの炒ったものがとても美味しくて、バマコ市のスーパーマケットで販売され、非常に人気があります。

カシューナッツ。下の部分が果肉にソラマメ状のナッツがついている。

現地活動報告
2009年11月～2010年3月

保健衛生

現在では、2008年10月から始まったトウグニコミュン31カ村を対象として3年間の事業の一部であるK会（ケネヤムソーの会・村の女性5人で構成、健康改善の会）の育成の為の研修会が3月で終了しました。2009年度は16カ村（80人）が対象でした。2010年度は残りの15カ村（75人）が対象となります。K会育成の目的は、村の人たちの健康は自分たちで護ることです。村から選ばれた女性5人のK会メンバーは、朝8時半から午後2時までの授業で、10日間に渡る研修を受けます。指導はカラのスタッフのアワと育成した助産師と看護師です。

そして、毎回手伝いについて行くアシスタントスタッフたちで、彼らは講義を聞いている間に学習内容を知り、アワに変わって講義をすることも出来ます。この進歩にも驚くものがあります。研修内容は、K会設立の意味、個人宅を訪問し衛生的に問題な点を話し合い解決に向けて考える、不潔状況と病気との関係、エイズやマラリア、下痢、怪我その他の病気予防、公衆衛生、出産関連、栄養指導が主で、ビデオも使用します。

この研修会では、とにかく頭に叩き込むように何度も何度も繰り返し指導をして、それを反復することですが、直ぐには新しい知識は頭に入りにくい様子でした。時として熱心の余り、5人の受講生に7人の講師という数のアンバランスにも気がつかないで、終了後に笑いを誘うこともありました。研修会に無断欠席者や不真面目な女性、そして遅刻者からは罰金を取ることもK会で決めていますから、参加する村も人々も非常な熱意を持って取り組んでいます。K会の5人の女性は研修会で学んだことを村長を筆頭に村の人々へ報告をして、その後の村での活動についての話し合い取り決めます。

K会メンバーはピンクのユニフォームを着て活動をします。村人への公衆衛生・病気予防・栄養・母子衛生等多くの研修内容に沿ったプログラムによる啓発学習は、村の公共広場で月に2回行うこと、公衆トイレの清掃、村内の清掃も実施計画を立てます。カラからは清掃用具も支給しています。

村でのK会の活動で一番心配したことは、通常、女性はたくさんの人の前で話をしたことが無く、果たして出来るのだろうか、ということでした。アワは研修会で覚えが遅く(悪く)何度も何度も繰り返し教え込んだ時には、まさかこのように上手に話が出来るとは全く想像していなかった、と言っています。

しかしその心配も無駄で、女性たちの素晴らしい話し振りに、監督に出かけたアワが感心していました。メンバーの一人が上手に話をすると「私だってあの人のように出来るワ、とか、負けられないワ」という気持ちが湧いてくるようです。個々の競争心が良い方向へと進んでいます。

K会メンバーは、エイズ予防や腸内寄生虫予防活動へも積極的に参加しています。2009年度の研修会を通して、助産師になれるような優秀な一人の女性をヌムブグー村から発掘することが出来ました。彼女は27歳の主婦で2人の子持ちです。この4月からバマコで研修を受けて助産師になります。これは村の女性たちにとっても、カラにとっても非常にもうれしいことです。

1月に完成したカチョラ村産院同様の産院が来年の今頃はヌムブグー村に建設されます。女性たちの安全な出産に貢献できます。

研修会が終了したK会メンバーとカラから供与された清掃用具

女性適正技術活動

人気の女性適正技術活動は、新設されたカチョラ村女性センター以外の他の村の女性センターでは、スタッフのアワの指導が無くても、自立して活動が出来るようになりました。カチョラ村女性センターへは器材も揃い、3月からスタートしました。裁縫、染色、石鹸つくり、刺繍の技術はセンターの建設に先立ち、村の何人かの女性が他の村の既存のセンターへ研修に通い、技術を習得して村の女性たちへ教えるようにしていますから、アワはゼロから指導することはありません。しかし運営と管理方法についてはよく知りませんから、その指導はアワが行っています。

今、多くの村の女性たちは共同で資金を蓄えて、それを元手に貸し付け事業を始めることを望んでいます。最初は、この貸付事業の経過に不安を感じていましたが、現在はそのような不安もほぼ解消されました。2002年にコニナ村、モバ村の2カ村のそれぞれの女性適正技術委員会から始まった貸付事業は、現在は8カ村に広がり、資金を借りている女性は410人です。2002年のスタート時から計算すると相当な数の女性が、資金を借りていると思います。これを元手とする女性の商いは、調味料の販売から、衣類の縫製や家畜の飼育販売と種々あります。収入は、家計を助け子供の教育費にしている女性が殆どです。村によっては、出稼ぎする女性も半減しました。

東京事務局より

皆様、はじめまして。2008年10月より東京事務局に勤務している＝本雅子です。よろしくお願いします。

昨年7月、ほぼ10年ぶりにマリに行ってきました。渡航前から「バマコはずいぶん変わった」「車が増えて近代化した」と聞いていました。確かに携帯片手に歩く若者達に驚き、バイクの多さに＝易したものの、正直なところあまり実感はできませんでした。前2回は舟旅中心だったため、河沿いの小さな村での滞在がほとんどだったので。

約15年カラの会員でいる私ですが、いざとなるとプロジェクトの進め方、現地スタッフとの連携の取り方等、本当に分からないことだらけでした。まして、今までのように気楽な一人旅で、現地の人と友達のように付き合うのとは違い、スタッフとして村上代表や当時現場にいた内野さんと一緒に（邪魔しないように）仕事をするとなると、自分の立場も求められていることも全く見当がつかなく＝々としたままの出発となりました。

現地に着いてからも、誇りを持って着々と自分の仕事をこなすマリ人スタッフ達を横目に見ながら、いったい自分に何を求められているのか考えていましたが、よくよく考えてみたら現地スタッフは何も期待などしているはずがないのです。私は東京の事務局で働くスタッフだと皆が知っている訳ですから、期待されているとすれば今回私が見て感じた自分たちの様子やマリ共和国について日本の皆さんに知らせて欲しい、ということではないでしょうか。そして活動している中で、もし、私にできることがあれば一緒に頑張れば良いのではないでしょうか。

そもそも今まで「日本人が教えに行くのではなく、そこで生活している人々に教えられることの方が多い」と何度も聞いていて「そりゃそうだよ」と思っていたのに、知らず知らずに何か自分にできるはずと思い込んでいたようで、いつの間にか＝っていた自分に苦笑するばかりです。

来月半ばより再度マリへ赴きます。昨年はカラの現地スタッフに「さすが長年のキャリアを持っている人達だ！」と感嘆させられ圧倒されるばかりだったので、今回は彼らの働きを見習いつつ、彼らの仲間として「活動が円滑に進むよう日本側からサポートする」という私自身の仕事をきっちりとこなしたいと思います。

国内活動

11/8	**【第28回 むさしの青空市】に参加・活動紹介**	武蔵野市民公園
11/26	**カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2009】**	銀座・十字屋
11/28	**日本女子大学【2009年度桜楓会バザー】に参加・活動紹介**	日本女子大学
12/18	**龍谷大学にて講演**	京都府・龍谷大学
2/26	**東北生活文化大学高等学校にて講演**	宮城・仙台
3/13	**国際ソロプチミスト町田 認証20周年記念式典参加** ホテル ザ エルシィ	
3/13	**H21年度 武蔵野市特定非営利活動法人補助金報告会にて事業報告**	武蔵野市役所

2010年4月以降の予定 日付の後に*印のあるものは決定しております

4/11*	**国際ソロプチミスト東京ー銀座 認証25周年記念イベントに出展・活動紹介** ホテルオークラ	
4/29*	**東京女子大学【園遊会バザー】で活動紹介**	東京女子大学
5/16*	**【東京白梅会】で活動紹介**	中野サンプラザ
6/12・13	**【アフリカン・フェスタ2010 in横浜】に参加・活動紹介**	横浜市・赤レンガ倉庫イベント広場
12/12	**カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2010】**	銀座・十字屋

からばす(Calebasse)−第23号− 2010年4月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会 http://ongcara.org/

東京事務局
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102
Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局
BP E367 BAMAKO MALI
Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589